

第42回大江戸散歩の会

湧水&名刹&観梅散歩

「洗足池～・・・池上本門寺～池上梅園」

緊急連絡＝070-5019-4033(伊藤まで)連絡のこと。

＜散歩道のご案内＞

洗足池は、武蔵野台地南端の湧水を堰き止めた池です。その昔、日蓮が身延山から常陸国へ湯治に向か途中にこの池に立ち寄り、手足を洗ったという伝説が広がり「洗足池」の名が世に知られるようになりました。江戸幕末期には、「江戸城無血開城」の立役者である勝海舟は風光明媚な洗足池をこよなく愛し、別邸を建て、遺言により池畔に墓所が建っています。そして日本画家「伊藤深水」の別邸であった「池上梅林」にて梅の香りを楽しみながら、日蓮上人入滅の地「池上本門寺」の歴史道を歩きます。

＜散歩道の順路＞ スタート東急目黒線「洗足池駅」

① 清水窪湧水地(大田区指定 天然記念物)

池の長さ約二十メートル。池の小島の小さな祠には弁財天がまつられている。この湧き水は武蔵野台地の端、千束の谷がつきるところにあり、旧村落の頃、この付近一帯を清水窪と呼んだのも、この地形のためである。ここから湧き出る水は洗足池の源流となり、かつて千束の谷が田畑であった頃、用水として水田を灌漑していた。

東京都内に残された数少ない湧水池として貴重である。昔は、池の周辺4～5ヶ所から水が沸き、田畑の灌漑用水にも使われていましたが、現在は1ヶ所から僅かに染み出ている程度になってしまったそうです。→大岡山北口商店街T→大岡山駅→東京工業大学

② 洗足池

この地域の古い地名は「千束」(せんぞく)であって、その名は平安時代末期の文献にも見られる。由来としては仏教用語の千僧供料(せんそうくりょう)の寺領の免田であって、千束の稲が貢租(税)から免除されていたとする説や、「大池」(洗足池の別称)を水源として灌漑に利用されたので稲千束分の税が免ぜられていたとする説などがある。のちに、身延山久遠寺から常陸へ湯治に向かう途中の日蓮が、池のほとりで休息し足を洗ったという言い伝えが生まれ、千束の一部が「洗足」となった。

日蓮が袈裟をかけたと言われる「袈裟掛けの松」(3代目)も残っている。(妙福寺も参照。)池の北側の中島には弁才天が祀られている。

③ 洗足八幡神社(源頼朝ゆかり)

洗足池に鎮座する千束八幡神社は、860年(貞観2年)に宇佐八幡宮が勧請され、千束郷の鎮守として祀られたことにはじまるという歴史のある神社。平将門の乱を鎮圧する

ため下向した鎮守府副將軍の藤原忠方は、乱の平定後、この地に土着しこの神社を氏神としたという。この藤原忠方が、のちに日蓮信者となる池上氏の祖といわれている。

また、奥羽平定に向かう途中の八幡太郎義家は、洗足池で禊ぎをして祈願し、安房から鎌倉へ向かう途中の源頼朝は、この地に陣を構えて諸將の参陣を待ったという。源頼朝所有の名馬として知られる「池月」（いけづき）の発祥伝説も残され、「旗挙げ八幡」と呼ばれる由来となっている。→池月橋(工事中)→弁財天

④ 勝海舟墓所・西郷隆盛留魂碑

勝海舟の墓が、なんでここにあるのか？ それはあの無血開城の合意が成された「勝-西郷会谈」の直前の話。東征軍の本営は、池上本門寺に置かれていました。つまり西郷は池上本門寺にいました。2人のトップ会谈の本番は港区の薩摩藩邸で開催されましたが、それより前に下打ち合わせの場が設けられ、勝海舟は西郷に会うために、池上本門寺に行きました。その通り道で「洗足池」の環境に惚れ込んでしまった勝。彼はのちにこの洗足池の脇に別荘を構えたのです。赤坂を愛した男は、晩年は洗足池を愛し、遺言で池の畔に彼の墓が作られたんです。そしてそのきっかけを作った盟友・西郷の留魂碑も、勝夫妻の墓の隣に作られました。

⑤ 妙福寺

日蓮宗寺院の妙福寺は、星頂山と号します。妙福寺は、持法院日慈（寛永6年1629年寂）が日本橋馬喰町に創建、明暦の大火（1657）により浅草永住町へ移転、関東大震災で被災し昭和2年（1927）当地にあった御松庵と合併して移転したといひます。御松庵は、日蓮上人が池上宗仲の館（池上本門寺）へ向かう途中に洗足池で休憩、老松に法衣をかけて、池の水で手足を洗ったことから護松堂・御松庵として創始したといひます。

⑥ 勝海舟別邸跡

鳥羽・伏見の戦い（1868）で幕府軍が敗れると、徳川慶喜より幕府側の代表として任じられた海舟は、官軍の参謀西郷隆盛（南洲）と会見するため、官軍の本陣が置かれた池上本門寺に赴きました。

その会見により江戸城は平和的に開けわたされ、江戸の町は戦禍を免れたのです。海舟は江戸庶民の大恩人と言えるでしょう。

その際、通り掛かった洗足池の深山の趣のある自然に感嘆し、池畔の茶屋で休息したことが縁となり、農学者津田仙（津田塾大学創始者、梅子の父）の仲立ちで土地を求めました。明治24年（1891）自ら洗足軒と名付けた別邸を建築しました。

明治32年（1899年）77歳で没しましたが、『富士を見ながら土に入りたい』との思いから、生前より別邸背後の丘に墓所を造りました。→中原街道記念碑

⑦ 雷谷八幡神社(横綱:大鵬ゆかり)・・・時間の都合でカットする場合があります。

当社の創建は永禄年中（西暦1557～1569）と誌され、北条左京太夫氏康の臣大田新六郎管内巡視の際、当初において法華経曼荼羅の古碑を発掘し、その奇縁により八幡大菩薩を創祀す伝う。

以来、旧中原街道沿道随一の由緒深き神社として人々の崇敬のもとに、雪ヶ谷の里の鎮護の神として四百五十年のご神徳をもって現在の盛儀をみるに至りました。

境内は、氏子崇敬者の御霊を祀る斎霊殿、末社八社をはじめ、大田区文化財指定庚申供養塔群、不世出の大横綱大鵬関奉納の出世石を有する鎮守の杜に囲まれ、四季折々参拝者の憩いの場として親しまれている→東急池上線乗車===「池上駅」(運賃 154 円自己負担)→<ランチタイム>→池上本門寺新参道

⑧ 比経灘持坂(加藤清正ゆかり)

この石段坂は、慶長年間(1596~1615)加藤清正の寄進によるものと伝えられる。「法華経」宝塔品の詩句九十六文字にちなんで石段を九十六段とし、詩句の文頭の文字「比経難持」をとって坂名とした。なお、石段は元禄年間(1688~1704)に改修されたといわれる。

⑨ 万両塚

芳心院〔宝永五年(1708)没〕は、紀州徳川頼宣の娘(養珠院お万の方の孫)で、鳥取藩主池田相模守光伸の室である。この墓所は約六〇〇平方メートルの墓域を有し、周囲に二重の堀溝が構築されている。当時その建設費が一万両に及んだといわれ、俗に「万両塚」と呼ばれている。

堀溝は芳心院が生前蛇嫌いであったために、没後も蛇を遠ざける目的で常時水が湛えられていたと伝えられていましたが、今回の調査で堀溝に水が湛えられていた形跡はなく空堀であったことがわかりました。

⑩ 五重塔

江戸時代 慶長12年(1607)に秀忠の病氣快方を願い建立したものである。願ったのは秀忠の乳母・正心院日幸尼(岡部局)である。国の重要文化財に指定されており、関東最古の五重塔である。

高さ29.37メートル(相輪から基壇まで)、屋根は一番下と二番目が「本瓦葺き」、三番目からは「銅板葺き」となり屋根の重量軽減を計っている。また建築様式は初層が和洋、他4層は唐様である。他の五重塔と比べ屋根の大きさの違いは少ない。→池上墓所(市川雷蔵・東映永田社長、力道山、大野伴穆墓所など)

⑪ 加藤清正墓所

山内最大級の宝篋印塔であり、塔身・笠・相輪が完備している。この供養塔は加藤清正(1562~1611)の息女で紀伊頼宣の室(夫人)瑤林院(1601~66)が父清正の満三十八年目の忌日に当たる慶安二年(1649)、その供養のため造立したものである。清正は、安土桃山時代の武将として有名であるが、熱心な日蓮宗信者でもあった。加藤清正父娘の信仰心と孝養心が、うかがえる供養塔である。→大堂→大坊坂

⑫ 紀伊徳川家女性達の墓所

なぜ、池上本門寺に紀州徳川家の墓所があるのかというと、初代紀州藩主・徳川頼宣公の生母であり、徳川家康の側室であった養珠院お万の方が日蓮宗の信者で、頼宣も日蓮宗

に帰依しており、さらに頼宣が法華経を信奉していた加藤清正の娘・瑤林院を妻として以来、池上本門寺との関係がより深いものとなり、江戸における紀州徳川家の菩提寺となったのだそうです。この墓所には、養珠院、瑤林院をはじめ、主として江戸藩邸で没した藩公の内室（令夫人）が埋葬されています。

⑬ 本坊本行寺(日蓮入滅の地)

自伝によれば：弘安5年（1282）、この地で日蓮聖人が入寂され、土地の豪族池上宗仲が、日蓮聖人がなくなられた土地を含め約7万坪を寄進、お寺の礎が築かれた。これが本門寺の起源という。当時の日蓮聖人は病に苦しんでおられ、身延山から常陸へと湯治にむかった。その途中…この地には、法華経の信者・豪族池上氏が館の中に建てた堂宇の開眼供養に立ち寄られたが、ここで、急に亡くなられたそうです。

⑭ 池上梅園(観梅後解散)

池上梅園は、池上本門寺の西に位置し、兵陵斜面等を利用した閑静な庭園です。政治家藤山愛一郎氏所有であった茶室「聴雨庵」と伊藤深水のアトリエを設計した数奇屋建設の設計家、川尻善治氏が自宅に立てた離れであった「清月庵」という茶室が池上梅園の中にあり、和を感じながら散策することができます。(解散) →最寄駅は都営地下鉄浅草線「西馬込駅」又は池上線「池上駅」